展示品一覧

○ 大図 下北半島北東部（むつ市・東通村）

「自江戸至奥州沿海図 第十七〈自泊 至下風呂　自城下沢 至横浜〉」

国宝：地図絵図類 番号７３　　文化元年、縮尺 36,000 分の 1

第二次測量時の享和元年 10 月 16 日に泊村を出立して、小田野沢村、尻谷村、大畑村に宿泊し、20 日に下風呂村を経て佐井村まで到達した。だがその先の海岸線沿いには現在も道がない。そこで 21 日からは手分けして平山宗平と尾形慶助が山越えして陸奥湾に抜け田名部までの海岸線を測量することとし、忠敬は関根村まで戻り田名部へ南下した。結果として関根村から田名部の間は忠敬最初の横切り測量となった。23 日の測量日記には田名部について「此所は奥北には稀なる所にて、寺院、医師、その外表立し人々学文を好み、詩歌等もなる人あり」と評している。

○ 大図 下北半島東南部（六ヶ所村･三沢市）

「自江戸至奥州沿海図第十六　〈自市川 至泊　又自横浜 至野辺地〉」

国宝：地図絵図類 番号７２　　文化元年、縮尺 36,000 分の 1

10 月 12 日に市川村（八戸市）を出立すると、それまでの三陸海岸から景観が一変した。忠敬先生日記では「家もなし船もなし、残らず白砂汀（みぎわ）なり」と記している。

13 日に「海辺に遠し」と記した浜三沢村を出立して海岸線を測量し始めた。測量日記によると、直ちに雪が降りだし風が強い。山々より吹き下だし大吹雪と成る。雪と砂を吹き散らし、視界がきかない。歩行が困難で、長持を楯として大吹雪･大風をしのぎ、風が弱まった時に歩いた。乗っていた駕籠の耐水性の桐油紙も海に吹き飛ばされ、駕籠の戸障子も飛んだが漸く取り戻すことが出来た。駕籠の中も雪が吹き込み外と同じで、からくも平沼村に着いたと記している。「咫尺を弁ぜず」と記しているが、これはホワイトアウトであり、遭難しても不思議ではない。当然のことながら「此日道路不測量」ということになった。翌日は手分けをして、忠敬らは平沼から測量を始め、平山郡蔵と尾形慶助が前日測量できなかった部分を測量した。

その後も「終日雪雹・大風」などに苦しめられたが、帰路にもあわや遭難という場面があった。11 月 8 日に野辺地を出立したが、長者ヶ窪に至って大吹雪となり進退が窮まった。駕籠をとめて待機したが、いよいよ風雪が盛んになり歩行不能となり、野辺地に引返すことになった。西暦 1801 年 12 月 13 日、江戸から 214 日目のことであった。文化元年上呈小図に記載された「沿海地図凡例」（『伊能忠敬の科学的業績』P318 所収）では、南部焼山とともに野辺地から仙台までの測量データについても注記している。野辺地からは日々雪にて、量程車･間縄などを用いることができなかったため、前年の蝦夷地測量の時の歩測のデータによって地図を作成したとの断り書きである。大図の左下隅には「自市川 北 五尺三寸一分九厘　至泊 西六寸四分二厘」「自野辺地 北 二尺一寸九分三厘　至横浜 東 七寸二分六厘」などと作図データが墨書されている。

さて、Inopedia の戸村様から『おらァ 下北半島サ 居るダ！』という blog の「伊能下北半島測量記」について情報提供があった。Blog 主様は昨年の 12 月 8 日・9 日には、雪中の下北半島測量を追体験されるという行動力に溢れた方である。厳冬の仏ヶ浦の写真を、滅多に雪の降らない佐原で炬燵に入って拝見していると、伊能測量隊にも Blog 主様にも申訳ない気持ちになった。

○ 大図 相模湾沿岸（江ノ島～熱海）

「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図 第三〈自藤沢 至沼津　自片瀬 至熱海〉」

国宝：地図・絵図類 番号１７、文化元年、縮尺36,000分の1

第2次測量と第4次測量の成果の江ノ島から熱海にかけての範囲の海岸線と東海道が描かれている。江ノ島の測線は海岸線と内陸の遊覧路の二重になっている。享和元年4月21日の測量日記によると、潮が引いていて歩いて江ノ島に渡ることができるうえ、島の周囲も測量できると知らされ、予定を変更して島内に宿泊して測量を行い、三弁天にも参詣した。伊豆山には「温泉」の文字と鳥居形の地図記号が記されている。

展示の大図では、右の記念館の中図「東海道歴紀州中国到越前沿海図 上」と同様に芦ノ湖には測線が無く、背景として絵画的に描かれている。「芦ノ湖一周四里三十町五十九間三尺」を測量し終えたのは、第9次測量の文化13年3月7日のことである。

この大図では朱書きで訂正した個所が目につく。地名の訂正だけではなく、領主についての新しい情報を追加して修正が行なわれた個所もある。川原谷村は箱根から進んで三島宿の手前の村で、小田原藩大久保家の支藩である相模国の荻野山中藩の所領であった。中図では領主の名は記されていないが、展示の大図では「大久保帯刀領分 河原谷村」を「大久保出雲守領分 川原谷村」と朱書で訂正が行なわれている。第3次測量の忠敬先生日記の享和3年3月3日には、石高や家数とともに「大久保帯刀知行所」と記載されており、大図の作成時の記載と一致している。では何故訂正が行なわれたのか。武鑑を調べてみると享和3年には「大久保帯刀教孝」とあり、大図や先生日記の記載に間違いは無い。ところが翌文化元年の武鑑では「大久保出雲守教孝」と変更されている。これはこの間に従五位下に叙せられて「出雲守」という官途名乗りが許されたということであろう。この文化元年上呈伊能図の控図が作成されたあとで判明した新しい情報を朱書で更新したのである。第一次蝦夷地測量の辞令書に「津田山城守」と記された佐原村の領主の旗本津田信久は、従五位下「能登守」に叙任され、その後「壱岐守」、「山城守」と改称している。地名の誤りは一度訂正すれば良いが、領主の交替や官位の変更をフォローするのは大変な作業である。

○ 大図 駿河湾沿岸（沼津～熱海）

「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図　第五　〈自沼津 至石部〉」

国宝：地図・絵図類 番号１９、文化元年、縮尺36,000分の1

第４次測量時の享和3年3月6日に沼津城下を出立して14日に石部村に到達するまでの「海浜浦々測量」の成果図であるため、第5次測量で測量する東海道は記載されていない。

3月9日には広重の絵で有名な薩埵峠で「休、中飯」となった。この日は「朝晴天」とあるので富士山の絶景を堪能できたことであろう。10日の測量日記には「美保松原にて羽衣の松あり」とある。

大図の久能山には、社殿とともに明治時代の神仏分離の際に取り壊された五重塔が描かれている。

○ 広域下図　東海道（高輪大木戸・川崎・戸塚・藤沢・大磯・二宮）

「自芝高輪大木戸至相模国淘綾郡山西村下図」

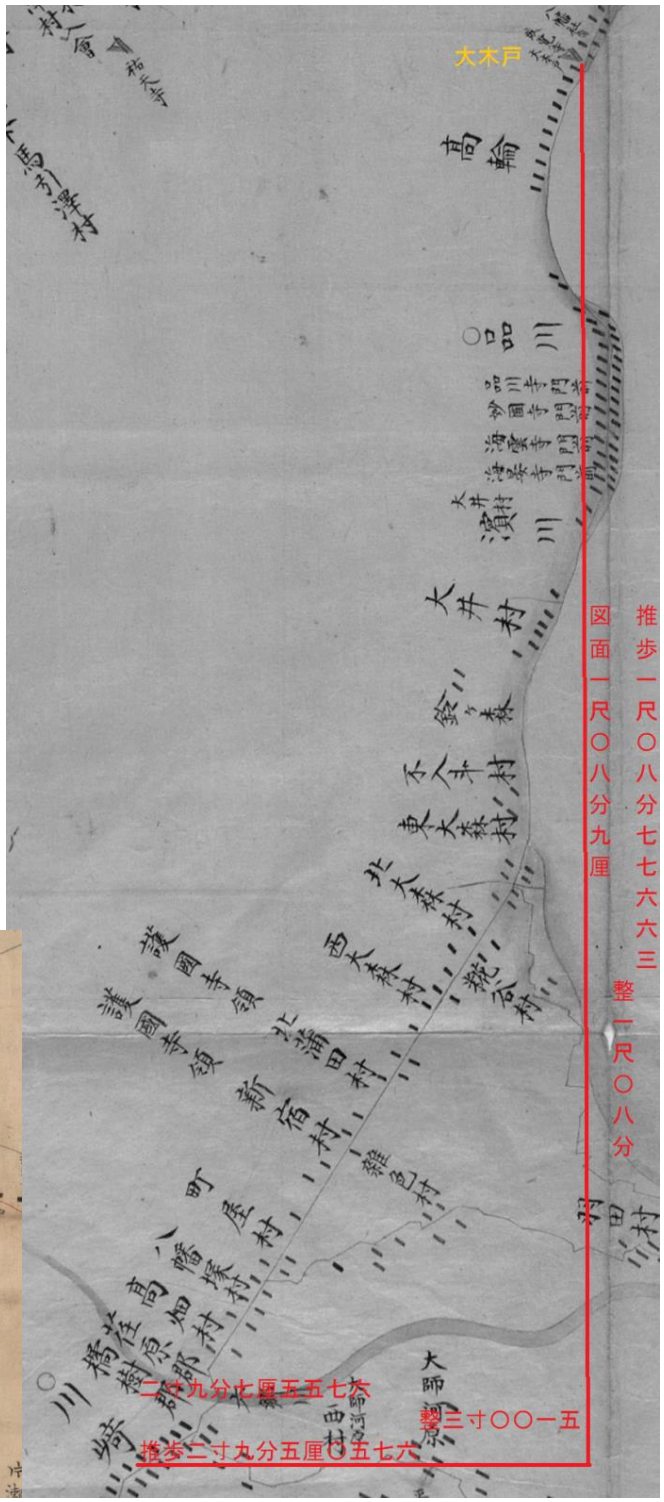
国宝：地図・絵図類 番号２７１　　85.7㎝×174.3㎝　　縮尺 36,000 分の 1

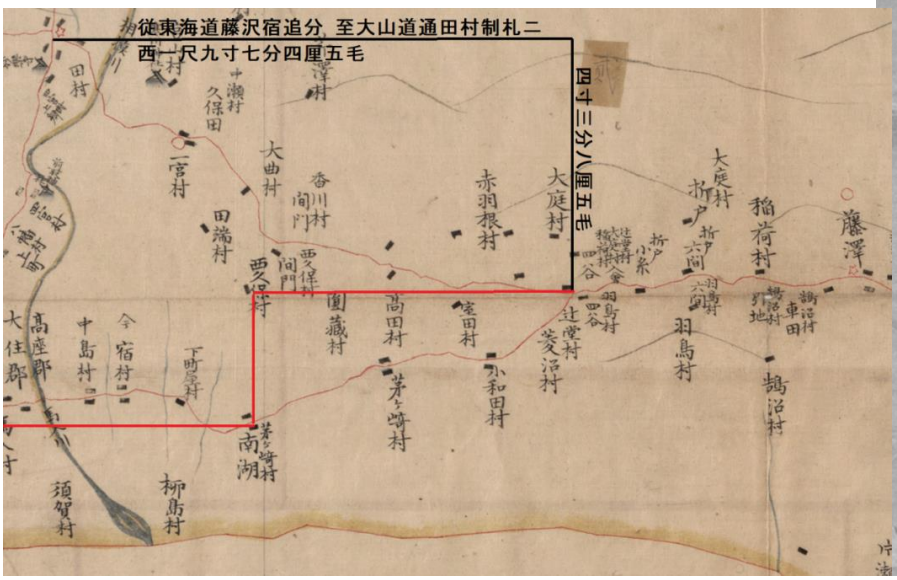
墨書で「東海道第一〈自大木戸・至山西村」と大書され、東海道は墨書の測線に朱で作図データが書き込まれている。芝高輪大木戸から山西村（二宮町）の南北方向の下図上の長さを「現度五尺〇一分二厘」と確定し、さらに大木戸と川崎、川崎と保土ヶ谷のように小区間ごとに南北方向、東西方向に朱の直線が引かれ下図上の長さが朱書されている。

東海道藤沢宿の西方に「東海道大山道追分」と記され、そこから大山道が分岐しており朱色の測線で記されている。作図データは墨色である。東海道と大山道では測線と作図データの色が逆になっている。

なお、大山詣と忠敬の大山道測量については会報 61 号の大沼晃氏「忠敬と江戸庶民の文化・大山講」が詳しい。

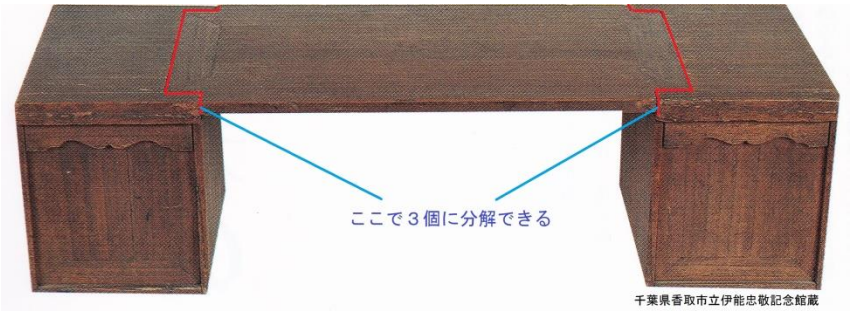
伊能忠敬記念館の国宝の伊能図を楽しむためには、倍率4倍程度の単眼鏡が欠かせない。測線の針穴も確認できるし、細部の絵画的表現も観察できる。今回の展示では、小田原城は城の形を簡略に書いてあるだけであるが、家康ゆかりの府中（駿府）城では石垣まで書き込まれており描写の精粗に差があることがわかる。





○ 組立机　国宝：器具類　番号５５

木製の組立机で、縦32.7㎝、横96.7㎝、高さ25.8㎝である。右袖には引出しが３段あり、左袖は棚が２段で、左右ともに慳貪蓋が付いている。天板、左右の袖の部分の３箇に分解できるので持運びが容易である。



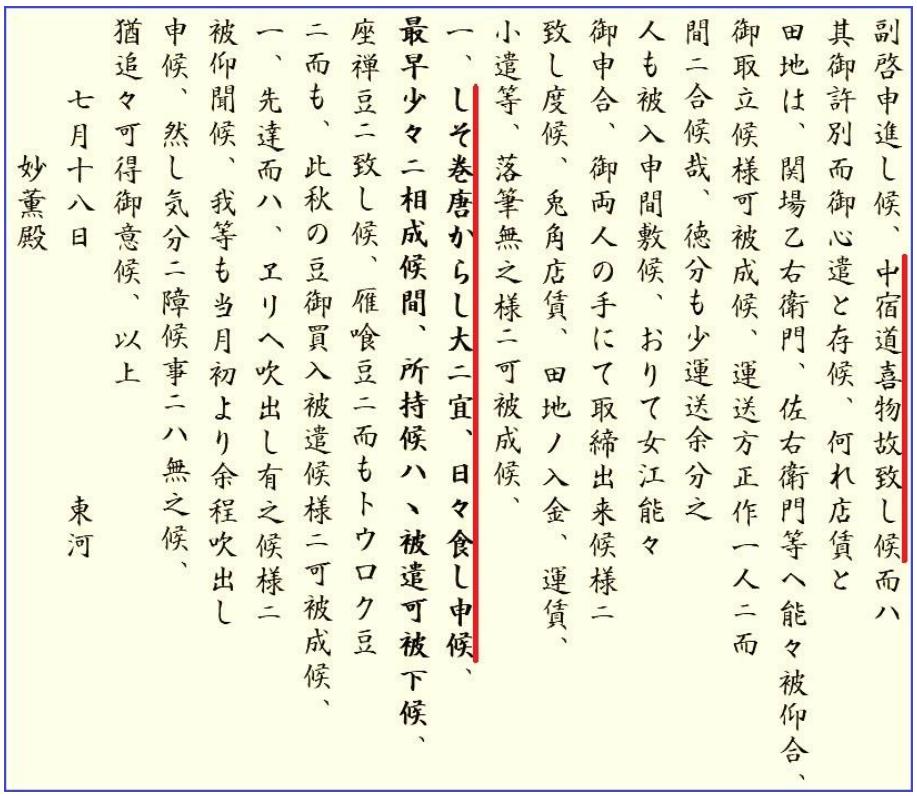
○ 妙薫宛の忠敬書状
（紫蘇巻き唐辛子は大いに宜しい。毎日食べている。残り少なくなったので送るように。）

国宝：書状類 番号９１　『伊能忠敬書状（千葉縣史料近世編文化史料一）』P123所収

佐原の娘の妙薫（イネの出家名）にあてた東河（忠敬の号）の書状が展示され、忠敬の好物の紫蘇巻き唐辛子を紹介している。続いて、座禅豆にするため秋には雁喰豆かトウロク豆を買入れるように指示している。

この書状の１行目に伊能平右衛門道喜が物故したとある。『伊能忠敬江戸日記』の文化12年7月10日に、道喜病気の処、養生叶わず、去る八日卯刻死去の由とあるので、文化12年7月18日に発したものであることが判明する。

『伊能忠敬書状』71の7月13日付書状で香典等について妙薫に指示し、この書状では今後の伊能平右衛門家との取引関係についても触れている。さらに2年前に当主の景敬を失った伊能三郎右衛門家を嫁のリテと娘の妙薫の二人で運営出来るようにと、帳簿の記入漏れまであれこれと心配している。


副啓申進し候、中宿道喜物故致し候而ハ
其御許別而御心遣と存候、何れ店賃と
田地は、関場乙右衛門、佐右衛門等へ能々被仰合、
御取立候様可被成候、運送方正作一人二而
間二合候哉、徳分も少運送余分之
人も被入申間敷候、おりて女江能々
御申合、御両人の手にて取締出来候様二
致し度候、兎角店賃、田地ノ入金、運賃、
小遣等、落筆無之様二可被成候、
一、しそ巻唐からし大二宜、日々食し申候、
最早少々二相成候間、所持候ハヽ被遣可被下候、
座禅豆二致し候、雁喰豆二而もトウロク豆
二而も、此秋の豆御買入被遣候様二可被成候、
一、先達而ハ、ヱリへ吹出し有之候様二
被仰聞候、我等も当月初より余程吹出し
申候、然し気分二障候事二ハ無之候、
猶追々可得御意候、以上
七月十八日　東河
妙薫殿

○ 書籍のリスト

「書籍書上」　国宝：文書･記録類 番号561、562

展示部分には14種の書名が記されているが、その内容はまちまちで分類されていないように思われる。「儀象考成」「ラランデ訳」などのような天文学書、「筑後志」「但馬考」「豊後風土記」のような地誌、イエズス会士の漢訳世界地誌「職方外記」、新井白石がシドッチを尋問して著した世界地理書「采覧異言」、蘭方医宇田川玄随の「槐園叢書」、麻田剛立の長兄の綾部妥胤の「家庭指南」、近藤重蔵の金銀貨幣の図録「金銀図録」などの書名がランダムに記されている。「ラランデ訳八冊」は冊数が一致するので国宝の「ラランデ暦書管見」のことであろう。

○ 和算の問題集

「天元問」　国宝：典籍類 番号 504、505、506

忠敬の嫡孫の忠誨による写本が３冊展示されている。それぞれ「方程正負」、「飯櫃形積門 四問」、「図方輪辺問」のページが紹介されている。